

Title	アダム・ スミスの生涯 (一)
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1922
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.16, No.2 (1922. 2) ,p.211(61)- 237(87)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19220201-0061">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19220201-0061</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

輕快なる  
春向洋裝品悉く取揃  
へ貴意に添るべし  
御思案御無用直に鈴  
木へ

慶應大學正門前

鈴木洋品店

高輪三三三五

古本の賣買は

義塾正門前の大進堂に限る

愈新學期來る此際萬卷の書を最も經濟  
的に通讀せんとする人は先づ大進堂に  
來つて問へ必ず貴下の満足に添はん

芝區三田東通り義塾正門前

大進堂書店

電、高輪三三六八

雜 錄

アダム・スミスの生涯 (一)

高橋誠一郎

アダム・スミスの生涯は先づ Dugald Stewart に由りて傳へられたり。初め彼れが一千七百九十三年一月二十一日及び三月十八日エッセンス・マロオの王立協會に於て朗讀せる所に於て、總じて一千八百十年幾多の脚註を添へ、單行書として出版せられた。更に Sir William Hamilton の總註せる The Collected Works of Dugald Stewart, Esq., F. R. S. S. 第十卷 (一千八百七十七年版) 中に編入せられた (pp. 5-98)。次に幾多の改訂版の諸版本の卷頭に掲げられたる Account of the Life and Writings of Adam Smith LL. D. 是れなり。スミス自身の後記スミスを傳ふる者頗る多く、吾人は凡そ左記の諸書を數々みるを得也。

W. Smellie, Literary and Characteristical Lives, 1800, pp. 211-97.  
W. Playfair, Life of Dr. Smith, before 11. ed of "Wealth of Nations." 1805.

James Patterson (Kay の Edinburgh Portraits, 雜著)。  
Lord Brougham, Philosophers of the Time of George III, pp. 166-289.

J. R. MacCulloch, Sketch of the life and writings of Adam Smith (Treatises and Essays on subjects connected with economical policy, 1853, pp. 443-467.)

(本誌は彼の Accounts of The Lives and Writings of Quesnay, Adam Smith, and Ricardo, 1859. 中の卷序を以て「更にこの同氏關於國富論」一千八百二十八年並に三十年版の卷首に掲げられた。)

Monjean (Coquehin, Dictionnaire de l'économie politique, II, p. 622-628.)

Baer, Adam Smith en zijn onderzoek naar den rijkdom der volken, 1858.

Léonce de Lavergne, Adam Smith (Revue des deux mondes, 2. pér. vol. 24, 1859, p. 893-929.)

Laspeyres, (J. C. Bluntschli u. K. Brater, Deutsches Staats-Wörterbuch, IX, S. 464-481.)

Puyrnode, Etudes sur les principaux économistes, 1868, p. 77-157.

T. Rogers, Historical Cleanings, 1869, pp. 95-137.

A. Oucker, Adam Smith in der Kulturgeschichte, 1874.

W. Bagehot, Adam Smith as a person (Fortnightly

Review, N. S. XX. 1876, pp. 18-42, 及び其の Biographical Studies, 1881.) (本雑誌 Journal des économistes, 3. série, vol. 43, p. 323-349. に翻譯せられたる)。  
 E. Nasse, Das 100 jährige Jubiläum der Schrift von Adam Smith über den Reichtum der Nationen. (Preuss. Jahrbücher, Bd. 38, 1876, Ss. 384-400.)  
 K. T. v. Inama-Sternegg, A. Smith und die Bedeutung seines Wealth of Nations für die moderne Nationalökonomie, 1876.  
 Helferich, Adam Smith und sein Werk über die Natur und die Ursachen des Reichthums der Völker, 1877. (本雑誌の Zeitschr. f. d. ges. Staatswissenschaft, Bd. 33, 1878, Ss. 277-295. に翻譯せられたる)。  
 v. Sudnitz, Am Grabe von Adam Smith. (Die Gegenwart, Jahrg. 1876, Nr. 9.)  
 Stöpel, Adam Smith im Lichte der Gegenwart, 1879.  
 J. A. Farrer, Adam Smith (1723-1790), 1881.  
 E. Leser, Aus der Lebensgeschichte des Adam Smith, in Untersuchungen zur Geschichte der Nationalökonomie, I, Ss. 3-46.  
 A. Oncken, Kirkcaldy (Beilage zur Allgemeinen Zeitung, Jahrg. 1884, Nr. 288 u. 289.)  
 Neurath, Adam Smith im Lichte heutiger Staats- und

Sozialanschauung, 1884.  
 Delatour, A. Smith, sa vie, ses travaux, ses doctrines, 1886.  
 R. B. Haldane, Life of Adam Smith (Great Writers Series), 1887.  
 J. K. Ingram (Encyclopaedia Britannica, 9th ed., XXII, 1887, pp. 169-171.)  
 Walcker, Adam Smith, der Begründer der modernen Nationalökonomie. Sein Leben und seine Schriften, 1890.  
 J. G. Courcelle-Seneuil, (Say et Chailley, Nouveau dictionnaire de l'économie politique, 1892, II, p. 810-814.)  
 John Rae, Life of Adam Smith, 1895.  
 H. C. Macpherson, 1899.  
 Leslie Stephen, (Dictionary of National Biography, vol. 53, pp. 3-10.)  
 James Bonar, (Palgrave, Dictionary of Political Economy, vol. III, pp. 412-424.)  
 E. Leser, in Conrad, Handwörterbuch der Staatswissenschaften, Zweite Auflage, VII, 1901, Ss. 749-757.  
 F. W. Hirst, English Men of Letters, 1904.  
 就中其の叙述詳細詳細を極め、メナムロー以来、新たななる資料の提供を企及し、極めて珍なりしスミス傳に多大なる貢献を爲せりとのイマホンローの Life of Adam Smith, 4

り。吾人が是れより以下に述べんとする所のものは大部分此の書に依據して、我が學祖の生涯を傳へんとするにあり。箇中レ一氏以外の諸書よりの引用、並びに同書よりせる間接の引用は一々之れを明記することと爲せるも、同書よりの抄録引用は其の煩を避けて悉く之れを註記することを省略せり。起稿に際して、先づ氏の力作に對し、多大なる感謝と敬意とを表せざるを得ざるなり。

一

アダム・スミスは今を去ること凡そ二百年の昔、一千七百二十三年六月五日を以て蘇國フアイン州 (County of Fife) なる當時人口僅かに一千五百の小都邑、カアノオデー (Kirkcaldy) に生る。其の父は同じくアダム・スミスと稱し、母はストラメホンリー (Strathendry, or Stratheny) 州の大地主ジョン・ダグラス (John Douglas) の女優マーガレット (Margaret) なり。彼れは彼れ等を父母とせる一人子にして、彼れが初めて此の世の光に浴したるの時は實に父逝きて數ヶ月の後なり也。(但し Scotsman 紙上に現はれたる一千八百

九十五年三月二十日、二十一日及び二十二日の通信に據れば、彼れの父は娶ると二回、スミスは一千七百〇九年を以て生れ、同五十年を以て逝けるヒュー (Hugh) なる異母兄を有したりと云ふ)。  
 彼れの父に就きては知る所極めて尠し。彼れはアバデアーン州 (Aberdeenshire) の産にして、一千七百〇七年エジンバラオの高等法院訴訟代理人 (Writers to the Signet) 而も Hirst は曰く辯護士と、前掲(註)の組合に加入するを得て、同市に於て法律事務を取扱ひ、翌年蘇格蘭土大臣兼大璽官ラアウドウン伯 (Earl of Loudoun, or London) の秘書役と爲り、同十三年ラアウドウン伯の退隱に由りて、其の職を失ふと共にカーロデオイ區の關稅吏 (comptroller of the customs) に任命せられ、死に至るまで其の職を奉せり。彼れは又た一千七百〇七年以來、終生、英蘇併

合と共に新設せられたる蘇國軍事裁判所參事官 (Judge Advocate) を兼ねたり。是れに由りて觀れば彼れは決して凡庸の器に非ざりしが如し。

スミスは元來蒲柳の質にして、幼時を通じて多病なりしが爲めに、母の心遣ひ例ふるにもなく、餘りに之れをあまやかせ過ぐるの非難を受けたり。而も斯くの如き母の溺愛は其の子の氣質若しくは性情の上に聊かも有害なる影響を生ずることなく、彼れは六十年の長歲月を通じ孝行の限りを盡して母の慈愛に報ひたり。彼れは幼時に於てすら人中に在りて放心の状態に陥り、單座して獨語するの習慣を有したるが終生之れを廢すること能はざりき。

彼れは三四才の頃、母に伴はれてリーヴン (Leben) 河畔なるストラッスエンリーに其の小父ダグラスを訪へることありしが、一日門前に獨り遊びて、恰も此處を通過せる一群の浮浪の徒

(蘇國に於て *Engels* と稱せらるゝもの) によりて拐され、暫く行末を求め兼ねたるが、間もなく一紳士の來りて、數哩あなたに於て物哀れに號泣せる一人の幼兒を抱けるジブシーの女に遭遇せる旨を告げたり。時を遷さず、指されたる方向に向つて驅せたる搜索隊はレスリート (Leslie) の森に於て其の女を發見せり。ジブシーの女は彼れ等を見るや否や、幼きスミスを抛げ捨て、走れり。斯くて彼れは恙なく其の母の懷に歸るを得たるなり。

スミスは其の最初の教育をカッポオデイ邑の文法學校に受けたり。當時其の校長たりしものは令名噴々たりしデヴッド・ミルラー (David Millar) 氏なりき。スミスが入學の年月は不明なるも、恐らくは一千七百三十三年を以て羅典語を學び初めたるなる可し。當時羅典語入門の教科書として使用せられたるものはユートロービ

II

ウス (Butropius) の「羅馬史要」(Breviarium ab urbe condita) なりしが、一千七百三十三年五月四日の日附と共に彼れの自署を有する同書は後年故カニンガム (Cunningham) 教授の所藏する所なりき。スミスは當時早く旺盛なる讀書慾と強大なる記憶力とを以て顯れ、其病弱なる體軀は激烈なる遊戲に加はるを得ざらしめたりと雖も、而も彼れは一面に於て熾烈なりしも他方に於て著しく深切にして大まかなる氣質を有したるが爲めにいたく其の朋友に愛好せられたり。彼れの同窓にして後年名を成すに至りしもの少なからざりき。

當時カッポオデイには一二の製釘所存したるが、スミスは少時之れを訪ふことを好み、茲に分勞に關する最初の觀念を取得せりと傳へらる (Campbell, Journey from Edinburgh through North Britain, 1802, ii. p. 49)。

一千七百三十七年、スミスはカッポオデイの文法學校よりグラスゴウ大學に赴き、此處に同四十年まで在學し、更らにスネル (Snell) 基金の給費生として牛津大學ペリオル、カレッジ (Balliol or Balliol College) に入れり。グラスゴウ大學時代のスミスと同窓なりしハーグ大使館附牧師アーチバルド・マックレーン博士 (Dr. Archibald MacLaine) ヨハン・ローレンツ・フォン・モースハイム Johann Lorenz von Mosheim の翻譯者にして、又た神學上の數著あり(曾つてダグガード・スチュアート (Dugald Stewart) に談りて曰く、スミスが同大學在學當時に於て愛好せる研究は數學及び自然哲學なりきと。スチュアートの父にしてエジンバラオの數學教授たりしマシュー・スチュアート (Matthew Stewart) も亦た、當時スミスの同窓たりし人にして、ダグガードは其

の父がスミスと相識るに至りし當時彼れの努力しつゝありしものにして、有名なるロバート・シムソン (Dr. Robert Simson) 教授が實習用として彼れに與へたる難解なる幾何學上の問題に就きて彼れを想起せりと云へるを記憶する旨を記せり (D. Stewart, Account of the Life and Writings of Adam Smith L. L. D., from the Transactions of the Royal Society of Edinburgh, read January 21, and March 18, 1793. in the Collected Works of Dugald Stewart, Esq., F. R. S., ed. by Sir W. Hamilton, Vol. X, 1877, p. 7.)。スミスは一千七百九十年僅かに其の死に先立ちて出版せられたる Theory of Moral Sentiments. の新版に挿入せる一章句に於て多大の尊敬を以てシムソン及びスチュアートの二人に言及せり (ibid., i. 313.)。

スミスは彼れがグラスゴーを去るの前に出席

其の「國富論」中に表明せる諸理論を预示する幾多の章句を包有するなり。彼れは「あらゆる價值若しくは價格の自然の基礎は或る種の用なり」、「富は勞働に由りて效用より區別せらる」而して「供給の限定は稀少價值を生ず」と稱して效用と價值とを區別せり (ibid., Vol. II, pp. 53 ff.)。即ち彼れは勞働が富の大源泉にして價值の眞尺度たることを主張し、總べての人は、公の利益が他を要求す可き場合を除き、他人の身體又は財産に對して何等の毀害をも加ふるとなき、如何なる仕事又は娛樂に於ても自己の目的の爲に自己の欲する所に従つて其の能力を使用するの自然權を有することを宣言せり。彼れは又た分勞の極めて重要なる所以を力説し、又た彼れが貨幣價値の起源及び變動並びに穀物若しくは勞働が更らに確固たる價値の標準を與へ得べきことを信するの意見は「國富論」中に於けるスミスのそれ

せるフランシス・ハッチェソン (Francis Hutcheson) の雄辯にして、然も深遠なる講義によりて最も力強き永遠の感化を受けたり。スミスは常に最も熱烈なる讚美を以て彼れを説けり。ハッチェソンは謂ゆる功利主義の倫理學說を創唱せる者の一人なり、斯學說の心隨たる人間行爲の理想を、之れに由りて誘致する「最大多數の最大幸福」に求むるの思想は早く彼れに於て看出る可きものなり。(Inquiry into the Original of our Ideas of Beauty and Virtue, 1720, § 3.)。彼れの主著 A System of Moral Philosophy. (此の著の出版せられたるは著者の死後、即ち一千七百五十五年なりと雖も、其の成れるは一千七百四十二年なり) は貿易の平衡、國家的制規及び人口等に關しては猶ほ幾分マーカンチリスト流の思想を有せざるに非ざるも、而も後年グラスゴー大學に於ける其の講座を繼承せるアダム・スミスが

と酷似するものあるなり。彼れは此の書の第二編第七章に於て公有及び私有財産を論じたり、而して彼れは普通近世經濟學者によりて慣用せらるゝ所とは幾分相違せる方法を以て私有財産を説明し擁護せり。「吾人が他の方法を以て自活し得る場合に總べて他人の無害なる計畫を破壊するは不道德なり、而して吾人が最初の占有者の權利を尊重する所以のものは這般の不道德に基礎を有するものなり」(ibid., Bk. II, chap. vi, § 5. 尙ほ Instituto Compendiaria, Lib. II, c. v. 參照)と説けるハッチェソンの所言はアダム・スミスが其の「法律學講義」に於て常に教授せる特異の財産權說に暗示を與へたるものなりと云ふ。即ち財産權は先占者が其の取得し若しくは發見せる客體を安全に享有せんとする正當なる期待 (reasonable Expectation) に對する人類の一般的同情、並びに公平なる傍觀者が斯くの如き正

當なる期待が裏斬らるゝを見るの際に彼れの感ずる憤怒に基くものなりと做すもの即ち是れなり。(Stewart, Philosophy of the Active and Moral Powers of Man, in the Collected Works, Vol. VII, 1877, p. 263.)

彼れが資本の起源を考査せるの邊に於ても亦た「スミス」の顯著なる類似を認めざるを得ず。(W. R. Scott. Francis Hutcheson: his Life, Teaching, and Position in the History of Philosophy, 1900. 及び Cananar's edition of Smith's Wealth of Nations, 1904, vol. I, Introduction, pp. xxxvi-xliii. 參照)。

而して若しデヴィッド・ヒューム(David Hume)が一千七百四十年三月四日附を以て「ハッチェン」に與へたる尺牘中に見ゆる「スミス氏」を以て果してアダム・スミスなりとせば、當時僅かに十六才の少年なりし彼れは近く出版せられたるヒューム著の『Treatise of Human Nature』の原稿を記したる

彼れは七月七日を以て同大學の入学を許されたり。彼れは其の最後に至るまで變ることなかりし小學生徒流の正しき書體を以て入学簿に「Adamus Smith e Coll. Ball, Gen. Fil. Jul. 7mo 1740」の文字を止めたり(Thorold Rogers's ed. of the Wealth of Nations, I. vii.) 彼れは自ら曰く文筆上の述作は彼れに取りては経験を重ぬるも毫も容易と爲ることなしと、而して筆跡に於ても亦た然りしなり。彼れの書狀は悉く同一なる正しき大文字を以て記され、明かに遲鈍、難澁、慎重なる手法を以て成れるを示しつゝあるなり。

スミスは其の入学より六年間、學年休暇にも歸省することなくして引續き牛津に留れり。蓋し當時に在りて費用極めて大なりし蘇國の往復は年四十磅の給費生に取りては堪え難きものなりしなる可し。一千七百四十四年、即ちスミスの

るものゝ如し。

三

スミスは一千七百四十年六月、蘇國を出發し、全行程を驛馬に託して牛津に向へり。彼れは後年サミュエル・ロージャース(Samuel Rogers)に物語れるが如く、英蘇の境を通過せる瞬間より、新たに見る國土の豊饒と其の農業が自國に比して遙かに卓越せるを深く感ぜざるを得ざりき。

彼れはペリオル、カレッジの食堂に着ける第一日に食卓に向ひて空想に陥り、暫く其の食事を忘れたり。給仕學生(servitor)彼れを呼び醒まして曰く、蘇國にては今汝の前に置かれたるものゝ如く見事なる肉片を見ること能はざるが故に須らく冥想を廢して、速かに食ふ可しと。

Monthly Review 記者の所言に據れば、彼れは自己の食卓に大肉片の現るゝ度毎に好んで此の物語を傳せしと云ふ。

牛津在學中に出版せられたるサムアン(Salmon)の Present State of the Universities. に據れば牛津學生生活の要したる最少限の經費は一ヶ年三十磅なりしと雖も、同大學の自費生(commoner)にして六十磅以上を消費せざるもの極めて稀なりしと言ふ。スミスは一千七百四十六年八月十五日まで牛津に留まりしものゝ如く、同日以後の同大學食物賣場會計簿(Battery Book)には彼れの姓名を見ることなし。

スミスの名はブリッス(Bris)の牛津卒業生名簿には見當らず、又たフォスター(Foster)氏の Alumni Oxonienses. は彼れに關する他の事項を掲ぐるも、其の卒業に就きては記する所なし。而もロージャース教授が前掲食物賣場會計簿に據りて調査せる結果は一千七百四十四年四月十三日を以て終れる週間より以後は彼が常に Dominus と稱せられつゝあることを發見せり。

ドミナスは大學得業士(Bachelor of Arts.)の通稱なりしなり。彼れは恐らく卒業の形式を完成するに必要な一定の手續を缺きたるなる可し。

彼れは不幸にして牛津大學の長き暗黒時代中に在學せり。スミスが自ら後年其の「國富論」中に於て英國諸大學に就きて云々せる所のものは又た實に三十年前、彼れの在學當時に於ける牛津大學の狀態なり也(Wealth of Nations, Bk. V, Chap. i, pt. iii, art. 2. 參照)。而も彼れが同大學在學の期間は決して彼れに取りて徒爲なるものには非ざりしき。彼は後年公然之れに對して感謝の意を表しつゝあるなり(一千七百八十七年十一月十六日附グラスゴウ、カレッジ學長アーチ

バルド・デヴィッドソン(Archibald Davidson 宛の

信書參照)。彼れは全力を擧げて同大學の常規の

非ずと雖も、ボードロー圖書館(The Bodleian Library)が一個在牛津の歴史を以ての階梯に對

して利用を許されざりし時代に在りては同大學に於ける最良なるカレッジ圖書館の一を有する

of the Lives and Writings of Quesnay, Adam Smith, and Ricardo, 1859. pp. 19-20.)

の一大利益を有せり。此處に彼れは自由なる讀書の界域を與へられて、其の健康を破ることをすら忘れて出精せるなり。然れども此の學園には彼れの自由に食ふことを許されざりし唯一の禁制の果實ありき。即ち近世合理主義の所産是れなり。ジョン・ラムゼー・マッカロック(John Ramsay McCulloch)は談りて曰く、スミス猶ほ牛津に在りし時、彼れが私かに研究しつゝある所のものに就き其の上長の疑念を醸しつゝありしが、一日其のカレッジの寮長等が不意に彼れの部屋に來れるの時、彼れは不幸にしてヒュームのTreatise of Human Nature. を耽讀しつゝあるを發見せられたり。斯くて此の「不都合なる」書籍は沒收せられ、此の青年哲學者は嚴烈なる譴責を受けたり也。(J. R. McCulloch, Accounts

古典及び美文學(Belles Lettres)並びに精神科學及び政治科學に向けたり。殊に彼れは佛國古典の語格を愛し、自己の文體を改善するの目的を以て屢々其翻譯に努めたりと言ふ。後年エツンパアロオ大學希臘語教授アンドリュー・ダルツェル(Andrew Dalzel)はダッガアド・スチュアートに向ひて言語學上の問題に關するスミスの記憶の敏速且つ正確なること及び希臘語文法の微妙なる諸點に關して彼れの示せる伶俐と熟練とを口を極めて賞讃するの常なりと言ふ。(Stewart, op. cit., p. 6)。彼れは斯くの如き知識を牛津に於て得たること固より疑ひなき所なり。彼れは又た伊太利亞の詩文にも通曉し之れを引用すること自在なりき。

研究資料の豊富を除きてはスミスの牛津生活は決して幸福なるものに非ざりしが如し。第一に擧ぐ可きは彼れの健康勝れざりしにして彼れは「痲疾の壞血病と腦の震戰症」(an inveterate scurvy and shaking in the head)に悩み、近くバクラー僧正(George Berkeley)が萬病癒治の妙藥として熱心に其の效用を鼓吹せる參兒水(Fairy Water)を使用しつゝありしなり。(一千七百四十四年七月末に其の母に送れる信書)。彼れは一千七百四十三年十一月二十九日の書中には「小子は恰も此の三ヶ月間小子をして其の肘掛椅子より離るゝこと能はざらしめたる懶慢の劇烈なる發作より回復したる所に候」と述べたり。(Lord Brougham, Men of Letters, ii. p. 216.) (ヘロネム卿はスミス傳を草するに當り一千七百四十年

より同六年に亘り彼れが幾通の信書を利用することを得たりと雖も、而も是れ等のもの、殆んど全部は純然たる家事及び私事に關するものにして、其の大部分は彼れのシャツ類其の他此の種の必需品に關するものなるも、而も皆な悉く其の母に對する強烈なる愛情の發露を示すものなりと。第二に蘇國の學生はペリオル、カレッジに於て繼子の待遇を受け、スネル給費生は其の虐遇に憤慨して、グラスゴウの評議員(Senatus)に對して常に不平を訴へ、終には他のカレッジに轉せんことをすら希望するに至れり。然ればスミスが牛津六ヶ年の在學中に於て其の親友中に擧ぐ可きものは僅に同郷の人にして、同じくスネル給費生たりしソールズベリーのダグラス僧正一人あるのみなりき。彼れは一千七百四十六年八月を以て蘇國に歸れり。爾後スミスは再び牛津に足を踏み入るゝことなく、牛津も亦彼

れを念頭に置くことなく、スミスが其の大名を成すに至りて後も、之れに博士の稱號を贈るが如きことなかりき。スミスは此の留學中に於て狭音の英語に感染することなかりしも、而も宏音の蘇國辯を失へるが如し。後年蘇國の史家ウリアム・ロバートソン(William Robertson)若しくは修辭學者ヒュー・ブラー(Hugh Blair)に會して後、スミスを訪へる英人は彼れが純粹なる英語を以て會談するに驚けりと言ふ。

四

スミスは一千七百四十六年秋より同四十八年秋に至る滿二ヶ年間、何等正規の業務に就くことなく、唯だ其の好む所の研究に耽りながら、母と共に郷里に留まれり。彼れは初め英國教會に入るの運命を有し、而して其の目的を以て牛津に派遣せられしものなるが、而も僧職は其の趣味に適せざりしが故に、其の友人等の忠告に

を得たりと言へば、一人の謝禮一ギニーと假定し、聽講者の數は一百名以上に達せしなる可し。是れ等の講義は一も出版せらるゝことなくして終れり。然れどもスミスの開演後十年、一千七百五十八年に同一題目の講演を開始せるブラーの記する所に據れば、是れ等のものは系統的形態に於て行はれたるもの、如し。即ち彼れが一千七百八十三年を以て出版せる Lectures on Rhetoric and Belles-Letters. の第十八講備考に於て彼れはスミスが久しき以前に其の一部を彼れに示した修辭學講義の草案より文體の一般的性質、殊に平易質實なる文體に關し、又た此の點に於て傑出せる英國作家に關し幾多の觀念を借用せる旨を記せり。(Ibid., i. p. 381.)。而もスミスの友人の多數は這般の感謝を以て甚だしく不十分なりと思料し、ブラー傳(一千八百〇七年)を草せるヒル(John Hill)はスミス自身も亦

悖りて蘇國に歸れるなり。彼れ去りて後、數ヶ月猶ほ牛津大學の帳簿には彼れの名を留めたり。

スミスは一千七百四十八年の後期に至り、エジンバラに其の居をトし、ケームズ卿(Lord Kames)、即ち當年のヘンリー・ホーム氏(Mr. Henry Home)の勸奨に由り、同學年及次ぎの二年を通じて、修辭學及び美文の講義を行へり。這般の題目は當時に在りて頗る嶄新なりしのみならず、未だ何人も之れに關して公會の講演を行へる者あらざりしなり。彼れはケームズ卿を首めとして、後の英國大法官アレグザンダー・ウッドアバン及びサー・ウィリアム・バルトニー(Sir William Pulteney)として久しく議會に雄飛せるウィリアム・ジョンストーン(Johnstone)の如き法學生、並び前掲のブラー博士の如き同市の青年法教師、其の他老若多數の聽講者を有せり。スミスは是れに由りて正味一百磅の收入

を得たりと言へば、一人の謝禮一ギニーと假定し、聽講者の數は一百名以上に達せしなる可し。是れ等の講義は一も出版せらるゝことなくして終れり。然れどもスミスの開演後十年、一千七百五十八年に同一題目の講演を開始せるブラーの記する所に據れば、是れ等のものは系統的形態に於て行はれたるもの、如し。即ち彼れが一千七百八十三年を以て出版せる Lectures on Rhetoric and Belles-Letters. の第十八講備考に於て彼れはスミスが久しき以前に其の一部を彼れに示した修辭學講義の草案より文體の一般的性質、殊に平易質實なる文體に關し、又た此の點に於て傑出せる英國作家に關し幾多の觀念を借用せる旨を記せり。(Ibid., i. p. 381.)。而もスミスの友人の多數は這般の感謝を以て甚だしく不十分なりと思料し、ブラー傳(一千八百〇七年)を草せるヒル(John Hill)はスミス自身も亦

た其の友人等と共に不平の語氣を漏したりと稱せり。然れども爰に亦た之れと全然相反する印象を與ふる逸事あり。そは Man of Feeling の

彼れが借用せる所のものは必ずしもスミス獨特の思想と稱す可きものにあらざりしが如し。

著者ヘンリー・マッケンジー(Henry Mackenzie)が詩人サミュエル・ロージャス(Samuel Rogers)に物語れる所のものなり。マッケンジーはスミスが會話の豊富なるを説き、彼れは幾度びか「足下よ、足下の言へる所のものは優に一卷の書を成すに足れり」と云ふの常なりしことを物語れる後、ブラーが屢々其の説教中に彼れがスミスとの會談より得たる法律學上の思想を取り入れたることをスミスに物語れる旨を記せり。而してスミスは之れに答へて曰く、「吾人は頗る快く彼れを迎ふ、猶ほ餘す所多し」云(P. W. Clayden, Early Life of Samuel Rogers, 1887, p. 168)。

今、スミスの著述中に散見する所、又たは友人等の記憶に存する其の談片を基礎として彼れが文學批評家としての意見の一端を窺知するを得可し。ウヅワム(William Wordsworth)は其の Lyrical Ballads(1798)の序文に於て彼れを呼ぶに「此の種の雜草を生ずること自然なるの觀ある國土、蘇格蘭土の産したる(デヴィッド・ヒュームを除きては)最惡の批評家」を以てせり。スミスは浪漫派よりも古典派を選べり。彼れはヴォルテール(Voltaire)と等しく、シエクスピアは優れたる場面を描けりと雖も、優れたる戯曲を草することなかりき、而して彼れはドライデン(Dryden)よりも大なる劇的天才を有せりと雖も、ドライデンは彼れに比して大なる詩人なりと思惟せり。彼れはミルトン(Milton)の小詩を

蔑視し、ピアシ(Thomas Pery)が其の Reliques 中に蒐集せる古き英國の小唄に至りては更に之れを尊重せる所少なきも、而もポープ(Pope)に對しては大なる嘆美を有し、グレー(Gray)にして單に今少しく多くを草せりとせば、彼れは英語を以てせる最大の詩人なりしなる可しと信じ、而してラシーン(Jean Baptiste Racine)の Phaedrus を以て世界のあらゆる國語に於て現存する絶好の悲劇なりと做せり。文學美に對する彼れ自身の大標準は彼れが其の Of the Nature of that Imitation which takes place in what are called the Imitative Arts. (Essays on Philosophical Subjects, 1795, pp. 134-184)中に定めたる「美は常に打ら勝たる可き知覺せられたる困難に比例す」と云へる原則に存するなり。

スミスが此の當時詩人たらんとするの野心を有せりと做するの言傳は惟りコールトン(Char-

les Caleb Colton)の Hypocrisy 中に引喩せられたるのみならず、彼れが逝去の翌年即ち一千七百九十一年の The Bee 誌上に掲げられたる無名氏との談片中に現れたるスミス自身の告白によりて確保せられたり。即ち彼れは其の客に對してミルトンのそれを除き一切の無韻詩に向つて假借なき侮蔑の言を發し、而して其の生涯を通じて唯一の韻詩をすら看出し得ざりし彼れと雖も、尙ほ其話説し得ると等しき速かさを以て無韻詩を作り得可しと云へりと報せられたり。因に記す、彼れが無韻詩を嫌惡せることに就きては興味ある挿話あり。一千七百五十九年グラスコビー・カレッジに於けるスミスの英文學の講義に出席せるボズウル(James Boswell)が是れより四月の後に至り、スミスが是れ等の講義に於て無韻詩を罵り、韻詩を稱揚せる強烈なる意見を表明せる旨をジョンソン(Samuel Johnson)に告

げたる時、ジョンソンは非常なる喜悅を以て彼れに言ひて曰く「君よ、余は曾つてスミスと共にありて、我れ等は互に親しむことなかりき、然れども余にして若し君が今余に物語りしが如く彼れが韻詩を愛すること大なりしことを知りしならんには余は彼れを抱きめしなる可し」と。

彼れは毎冬期引續き三ヶ年間英文學に關する講義を行へる外、少くとも一千七百五十年より同五十一年に亘れる冬期に於て經濟學に關する講義を行へり。此の講義は一千七百四十九年に物せられたる所にして、其の中に於てスミスは商業自由の學說を主張せり。彼れは此の事實を後年スチュアートの所藏に歸せる一千七百五十五年グラスゴウの某學會に於ける講演草稿中に自ら記しつゝあるなり。(Stewart, Works, op. cit., vol. x. p. 68.)。當時彼れの思想の上に有力なる影響を及ぼしつゝありしものにジェームズ・オ

スワルド (James Oswald) あり。彼れはスミスに比して八才の長者にして後、商務及び拓殖事務官、大藏參事官、並に愛蘭大藏次官と爲り、一千七百六十八年五十二才の壯齡を以て逝ける人なり。スミスがオスワルドに傾倒せることヒュームに譲らるる事 (Memorials of the Public Life and Character of the Right Hon. James Oswald of Dunkier, 1825, Preface; Stewart, op. cit., p. 81.)。ヒュームは早く一千七百五十年、其の有名なる「貿易平衡」論 (同五十二年に至り其の Political Essays. 中に出版せられたるもの) の手書をオスワルドに送りて其の意見を徵せり。オスワルドは十月十日 Caldwell Papers に掲げた長文の書簡中に於て之れに答へたり。(i. 93.)。彼れは其の物産及び貨幣を空竭せしめらる可しと做す諸國民間に於ける嫉妬は全然不合理たる可きことを宣言し、斯くの如き事實は人民と産

業の殘存する限り決して生起することなし、貨物及び貨幣の輸出禁止は常に其の所期に正反對の結果を生じたることを主張せり。即ちそは國內の耕作を増加せずして却つて之れを減少し、而して物産の輸出を防止すること愈々大なれば貨幣を國外に驅逐すること愈々大なりと做せり。

スミスは又たジェームス二世黨 (Jacobite) に與せるが爲めに當時ルーアン (Rouen) に亡命しつゝありし The Braes of Yarrow. の作者ウイリアム・ハミルトン (William Hamilton) の友人等の依頼を受けて其の詩集を纂輯出版せり。一千七百四十九年ロバート・フールズ (Robert Foulis) 刊行グラスゴウ版 Poems on Several Occasions. 即ち是れなり。本書は一千七百四十八年十二月二十一日グラスゴウ附の序文を掲げたり。スミスの筆に成れるものなり。彼れはハミルトンが

一千七百五十年特赦を受けて歸國してより、同五十二年再び病魔に追はれて大陸に流寓するに至る短少なる其蘇國の滯在中に於て之れと親交を結べり。一千七百五十八年の第二版にはハミルトンの名を掲げ、第一版の序文中に其の收録せる幾多未刊行の詩篇を寄せたる人として擧げられたる詩人の友人にしてグラスゴウの商人なるウイリアム・クロフム (William Craufurd) に對する献本之辭を載せたり。一千七百五十七年十二月、史家サー・ウイリアム・ダリムプル (Sir John Dalrymple) がスミスに請ひて此献本之辭を起草せしむることをフールズに依頼せる書簡によりて案ずるに恐らくそはスミスの手に成れるものなる可し (Duncan, Notes and Documents illustrative of the Literary History of Glasgow, p. 25; James Paterson's new edition, 1850, p. 10.)。

五

スミスは其のエッスンバロオに於ける講演の好評なりしが爲めに一千七百五十一年一月九日を以て、其の前年ロンドン(London)氏の逝去に由りて空虚と爲れるグラスゴー大學論理學講座に選任せられ、同十六日就任式を了したるも、十月に於ける次期の開始に至るまで授業を行ふことなかりき。蓋しエッスンバロオに於ける講義を完了するの必要ありしが爲めなり。因つて一月より六月末に至るまで法律學教授ハーキュリーズ・リンゼー博士(Dr. Hercules Lindsay)其の代講を行へり。然るに同大學に在りて精神哲學の講座を擔任せるハッチェソンの直接後繼者 Thomas Craigie 氏病氣休講の爲め彼れは又た精神哲學の講義を行はざるを得ざりき。而して此の二重の負擔は疑ひもなく彼れが既にエッスンバロオに於て行へる講義の資料を利用すること

を得たるが爲めに少なからず輕減せらるゝを得たりしなる可し。蘇國の諸大學に於ける教科の傳統的分配によれば、論理學の講座は修辭學及び美文學を抱擁し、精神哲學は法律學及び政治學を包含せるが故に、スミスは曩きに講述せる修辭學及び美文學並びに法律學及び政治學に關する項目を以てグラスゴーに於ける第一期講演の題目たらしめたり。(Sewart, op. cit., p. 11. 所載ジョン・ミラー氏の所言並びに Thomson and Craigie, Life of William Cullen, vol. 1, 1832, p. 605. 所載一千七百五十一年九月三日醫家カレン宛スミスの書翰参照。)

然るに Craigie は終に同年十一月二十七日を以て長逝し、翌五十二年四月二十九日、スミスは何等の反對をも受くることなくして其の後繼者に任命せられたり。然るに早くよりして斯くの如き結果を豫想し、總がでスミスの去る可き

論理學の講座に對し、冬期の全部を通じて激烈なる競争行はれたり。デヴィッド・ヒュームは其の候補者として現れたり。猶ほエドマンド・バーク(Edmund Burke)も亦た當時其の候補の一人なりと云へる虚妄の傳説すら傳はれり(Bisset, Burke, i. 32; Prior, Life of Burke, Bohn's ed. p. 38)。然れども後一千七百七十四年より一千八百二十四年に亙りて同講座を擔任せる Outlines of Philosophical Education, 1818. の著者 ジャアデン(George Jardine)教授は、選舉人中にはバークを以て適任と思惟せるものありしも然も事實彼れは候補者として現れたることなしと主張し(Outlines of the Philosophy fo Education, p. 23)。スミスは明かにスチュアートに談りて、彼れは斯くの如き流説の生じたる所以を知らず、或ひは彼れが自らバークの著 Sublime and Beautiful. の出版に際し、若し此の書の著者

にして一講座を擔任することを承認せんか、そは本校に取りて大なる所得たる可しとの意見を表明せるより生じたるものには非ざるかと言へりと傳へらる。(Prior, op. cit., p. 38)。ヒュームはカレン等の熱心なる後援ありしに拘らず、アーガイル公(Duke of Argyll)の干渉によりて其の目的を達すること能はず(公は王室講座以外に對しては毫も任命の權を有せざりしと雖も而も其の一切に對して干渉する所多く、且つ多大なる勢力を有したりと信せられたり)、同講座はクロー(Crow)と稱する無名の青年教會學士(Licentiate)に與へられたり。スミスは固より如何なる候補者よりも其の親友ヒュームを以て勝れりと思惟せりと雖も、而も彼れの如く懷疑論者として一般に認められつゝある人物を選任するは蘇國の輿論に悖り、同大學に取りて不利益と爲るの虞れあるとを熟知せり。(一千七百五十

一年十一月火曜日附カルレン宛書簡参照 Thom-son, op. cit., i. p. 606.)

スミスが精神哲學の講座を選べるは主として其の中に於て教授せらる可き題目に興味を有したるに由ること疑ひなき所なりと雖も、是れより生ずる物質上の所得も亦た幾分大なりしが如し。蓋しスミスは其の就任の條件として同年十月十日(新學年開始の當日)に至るまで、其の論理學教授の現職に對する俸給及び所得を以て満足す可きとを特に要求せられたるを以てなり。

精神哲學教授の所得は俸給及聽講學生によりて支拂はるゝ謝禮より成る。俸給は數學講座が一ヶ年七十二磅なりしと云へば (Caldwell Papers, i. 170)、恐らく其の以上に出づることあらざりしなる可し。スミスの後に精神哲學の講座を擔任せる蘇國哲學派の創始者トーマス・リード博士(Dr. Thomas Reid)はグラスゴオに於ける二

と爲りたる時は諸教授は其の席次に從ひて選擇權を有するの慣習なりき。斯くて彼れは一千七百五十六年其の友人カルレンがエツンバアロオに轉任するや、其の舊宅に移り、次いで五十七年、同じき年に逝去せる自然哲學教授ディック(Dr. Dick)の住宅を襲ひ、更らにリーチマン(Dr. Leechmann)が同六十二年を以て學長(Presidentialship)に榮轉すると共に其の舊居に轉せり。彼れは當時其の母並びに其の小母ジェーン・ダグラス嬢(Miss Jane Douglas)と共にグラスゴオに居住せるを以て、斯くの如き頻々たる轉居も或ひは是れ等女性の希望に出でたるものには非ざるか。

スミスの時代に在りてグラスゴオ大學は總計三百人内外の學生を有せるに過ぎず、而して精神哲學の講座のみにては正科(Public class)八九十名、別科(Private class)二十名を越ゆるとあら

ヶ年の經驗の後、郷里アバアデインの一友人に書を寄せて、彼れはスミスが會つて有したるよりも多數の學生を有し、既に七十磅の謝禮を收受せりと雖も、全部の學生にして到着せんか、同學年には一百磅を收得す可きを期待すと云へるによりて案するに (Sir William Hamilton, Reid, 1853, p. 40) スミスの受けたる謝禮は恐らく一百磅を越ゆることなかりしなる可し。第十八世紀に於ける蘇國大學の講座に對する謝禮の高は收穫の豊凶、景氣の善惡に由りて學年毎に著しく變動するを免れざりき。スミスは又た其の住宅に時々一人の寄宿生を置き、是れに由りて幾分の利得ありしも、其の正規の所得は一ヶ年百七十磅以上に出づることなかりしが如し。彼れは其の俸給の外に同大學構内に住宅を給せられ、而して其の十三年間の在職中に三度び之れを轉じたりと傳へらる。即ち或る家屋が別屋

ざりしなり。當時大學の開校期は現今より長く、十月十日より六月十日に及べり。スミスは午前七時半より同八時半に亘りて正科の講義を行ひ、それより午前十一時に彼れが同朝行へる講義に就きて一時間の試験を行ひ(此の試験には僅かに朝の聽講生中其の三分の一の出席を見るに過ぎざるの常なりき)而して一週二回正午十二時に別個の問題に就きて別科生の爲めに講義を行ふの外、スミスは時々宛も特別教師(tutor)の如く、特殊の學生の爲めに一時間の朗讀講義を行へるが如し。(アスケーニアス Ascarius の名に隠れたるブアン伯(Earl of Buchan)が一千七百九十一年六月の Bee 誌に寄せたる其の舊師の回想錄参照)寛柔温良なるスミスは常に學生との會談を避くることなかりしのみならず、彼れ等の間に有爲なる者を看出し、之れを自家に招じ、其の講義の題目及び其の他の問題に就きて

彼れ等と討議し、而して多大なる同情を以て彼れ等が將來の企圖及び計畫に耳を傾くるの常なりき。

六

スミスの最も愛せる門下の一人にジョン・ミラー(John Millar)あり、後年グラスゴオ大學の法律學教授と爲れる人にして、彼れがスミスに傾倒すること大なりしと等しく(Millar, Historical View of the English Government, Bk. II. chap. 4 参照)、スミスも亦たミラーが學生を鼓舞獎勵する上に於て無比の力を有することを推稱し、其の従弟デヴィッド・ダグラス(David Douglas)をグラスゴオ大學に送れるは偏にミラーの講演に列し、之れと會談するの利益を思へるが爲めなり。彼れは終にスミスの自由貿易論を承認することなかりしと雖も、然も當時蘇國に於ける最も有力なる自由主義の使徒なりき。スミスが

グラスゴオ大學の教授として行へる講義は彼れが自ら「道徳的情操論」及び「國富論」中に公表せる部分を除きてはエドウィン・カンナン(Edwin Cannan)が一千八百九十五年四月二十一日、偶然初對面の辯護士 Charles C. Maconochie 氏より彼れがスミスの法律學講義の筆録を所藏せると聞知し、翌九十六年之れを刊行するに至るまでは全く吾人に傳存する所なきものと想像せられ、唯だ僅かに吾人はミラーの談る所に據りて其の講義の要旨を知ることを得たるのみなりしなり。(Lectures on Justice, Police, Revenue and Arms, delivered in the University of Glasgow by Adam Smith reported by a student in 1763 and edited with an introduction and notes by Edwin Cannan, 1896. pp. xi-xxi. 参照)。

即ち彼れ曰く「スミス氏は彼れが初めて本大學に招致せられたる際に任命せられたる論理學

の教職に於て直ちに其の先任者の墨守し來れる計畫を著しく離れて、諸學派の論理學及び形而上學よりも更らに興味あり、有用なる性質を有する諸研究に其の學生の注意を導くの必要を觀たり。斯くて彼れは心意の諸方に關する概觀を示し、而して従前識者の注意の全般を占領せる巧妙なる推理方法に關して好奇心を満足せしむるに必要なる限度に於て古代の論理學を説明せる後、爾餘一切の時間を擧げて修辭學及び美文學の體系を講述するに充てたり。純正哲學の最も有用なる部分たる、人間心意の諸力を解釋し、説明する最良の方法は言語によりて吾人の思想を傳達する諸種の様式の檢察並びに勸誘及び受容に貢獻する作文上の原則に對する注意より生ず。是れ等の技術に由りて吾人が知覺し又た感覺する一切のもの、吾人が心意の一切の作用は明確に區別し、記憶せらる可き體様に於て表明

せられ、描寫せらるゝなり。同時に文學の諸部門中に在つて、初めて哲學の研究に従へる青年に取りて斯くの如く彼れ等の趣味と彼れ等の感情とを把握するものよりも勝りて適當なるものなきなり。」

「斯の問題に關するスミス氏の講演が其逝去の前に破毀せられたること洵に遺憾に堪えざるなり。最初の部分は措辭の點に於て著しく完成せられ、而して全體に亘りて風韻と創造的天才との強烈なる標號を看出すなり。筆記を行ふの許可を學生に與へたるが爲に、是れ等の講義中に包有せられたる數多の觀察及び意見は其の後公表せられたる獨立の論文中に於て縷述せられ、又たは一般的聚集中に於て淨寫せられたり。然れども是れ等のものは當然豫期せられ得るが如く、彼れ等が其の最初の著者より受けたる獨創の態度と特異なる性質とを失ひて、彼れ等の投

入せられ捲き込まれたる平凡なる事項の複合によりて蒙蔽せられたり。」

「スミスは彼れ等が論理學の教授に任命せられてより凡そ一ケ年の後、精神科學の講座に選任せられたり。此の問題に關する彼れが講義の課程は四部に分割せられたり。第一は「自然神學」を包有し、彼れは爰に神の存在及び屬性の諸證左並びに宗教の基礎を成せる人間心意の諸原理を考察せり。第二は嚴密なる意義に於ける「倫理學」を包含し、主として彼れが後に至つて其の「道徳的情操論」中に公にせる諸學說より成る。第三部に於て彼れは「公正」に關し、又た精緻にして正確なる法則を收受し得可きが故に是れに由りて詳密精細なる説明を行ひ得可き底の道義の部門を更らに巨細に論述せり。」

「此の問題に關し彼れはモンテスキュー(Montesquieu)によりて暗示せられたるの觀ある計て演述せる所のものは彼れが後に至つて「諸國民の富の本質及び原因の研究」なる題下に公にせる著述の要旨を抱有するなり」。

「教授としてよりも更らに好くスミス氏の技倆の現る可き地位は存せざりき。彼れは其の講義を行ふに際し殆ど全く即座の辯術に信頼せり。彼れの態度は優雅ならざりしも純樸にして淡泊なりき、而して彼れは常に其の題目に興味を有するの觀ありしが故に、彼れは決して其の聽者の注意を惹起せずして終ることなかりき。各個の講話は概して彼れが順次に論證し説明せんとせる種々なる特殊の命題より成れり。是れ等の命題は一般的名辭に於て表明せられたる時、其の廣漠たることにより幾分逆説パラドックスの觀を有すると稀れならざりき。彼は是等のものを解説せんとするに當り、初めは屢々其の主題を十分に會得せざるものゝ如く、幾分口籠りながら物語るなり。

書に従ひ、最も粗野なる時代より最も精鍊せられたる時代に至るまで、公私兩法律思想の漸次進歩し來りたる跡を探及し、生存及び財産の集積に資する諸技術が之れに相應せる法律及び統治の改正若しくは變更を生ずるの効果を指摘するに努めたり。彼れは其の力作の此の重要な部門をも亦た社會に發表せんことを期したるも而も彼れは終に「道徳的情操論」の結末に誌されたる這般の意向を遂行することなくして遊けり。」

「彼れは其の講義の最後の部分に於て「公正」の原則に基礎を有することなく、「便宜」(expediency)のそれに基づき、而して一國家の富と力と繁榮とを増進するものと思料せらるゝ政治的制規を考查せり。這般の見地の下に彼れは商業、財政、宗教的及び軍事的施設に關する政治的制度を考察せり。彼れが是れ等の諸問題に就き

然れども其の進むに従ひ、彼れの態度は熱烈にして活潑と爲り、而して其の表現は圓滑にして流暢と爲るなり。論争を生じ易き諸點に於ては諸君は容易に彼れが密かに其の意見に對する反對を思料し、而して更らに大なる精力と熱心とを以て之れを擁護するが爲めに此の如き手段に出でたることを察知するを得可し。彼れの舉例の豊富にして多様なるに由りて主題は漸次其の手中に於て増太し、而して同一意見の冗長なる反復なくして、總べて其の現示せらるゝ種々なる陰影及び相貌を通じて同一問題を追及し、而して後、此の美しき推究の序列が發出せる本源的命題若しくは一般的眞理に之れを復歸せしめて、其の聽衆の注意を捉へ、而して彼れ等に教訓と等しく快感をも與ふるものと思料せられたる廣褒を取得せるなり。

斯くて教授としての彼れの名聲は頗る高きに

至り、而して多數の學生は偏へに彼れ在るが故に遠隔の地より同大學に來れり。彼れの教授せる部門の科學は此の地に於ける流行と爲り、而して彼れの意見は諸俱樂部及び文學會に於ける主たる論題たりき。彼れの發音又は話説の態度に於ける些細なる特色すら往々にして模倣の對象と爲れり。」(Stewart, op. cit., pp. 11-13.)

Essay on the Nature and Principles of Taste, 1790.の著者アーチバルド・アリンソン(Archibald Alison)がミドルセックスの副僧正ジョン・シン

クレーア(John Sinclair)に談れる所に據れば、彼れは常に講義を行ふに當り、其の聽者の同情に依頼すること遙かに他の諸教授に越えたるの事實を承認せり。彼れ曰く、「一學年の全部を通じ、平凡なるも而も表情的なる容貌を有する或る一人の學生は余の成功を判断するが爲めに余に取

りて頗る有用なりき。彼れが柱の前に座せる様目立ちて見えたり。余は絶えず彼れを注意せり。彼れにして若し前方に乗り出して熱心に耳を傾くる時は成功疑ひなき所にして、余は余の學級をして快く傾聽せしめつゝあるを知る、而も彼れにして若し後方に凭れて不注意の態度を示す時は、余は直ちに萬事非にして余は主題若しくは余が話法の孰れかを變せざる可らざることを感ずるなり。」(Sinclair, Sketches of Old Times and Distant Places, 1875, p. 9.)

彼れの學生の大多數は長老教會の教職たる準備を行ひつゝある青年より成り、其の三分の一は自國の大學より不當に排斥せられたる愛蘭土の非國教徒にして、實に彼のリードが(Dr. Theod. Reid)是れ等の愚鈍なるチーグ(Teague 愛蘭土人の異名)に向つて講義するに當りては常に聖アントニーが魚類に向つて傳道せる際に感ぜ

ざるを得ざりしに等しき感を有すと云へる所のものなり(Hamilton, Reid, p. 43.)。尙ほスミス

の講義に列せる者に檢事ヘンリー・エルスキーン(Henry Erskine)、シエムズ・ボズウェル、フィッモーリス(Hon. T. Fitzmaurice)、あり。後年フィッモーリスは有爲の資を抱きて空しく不治の病床に呻吟しながら、永くスミスの講義に列し、其の家庭に寄寓せる樂しき往時を追懷して止まざりきと云ふ。ヴォルテールの友人にして、ルッソーの敵なりしジュネーヴの大醫トロンシャン(Dr. Théodore Tronchin)は特にスミスに就きて學ばしむるが爲めに一千七百六十一年、其の子をグラスゴオに送れり。而してスミスの教授としての名聲は年と共に次第に高まり行きて、漆喰製の其の胸像は書肆の店頭を飾りつゝありしなり。(未完)

## 國有鐵道と運賃政策

増井幸雄

分業が人と人との間に行はれ地方と地方との間に行はれて居る所の現代の經濟生活は交通機關なくしては支持せられ難い。交通機關の一種たる鐵道は、此の意味に於て現在の社會の支持者であり、その根本的の基礎をなして居るものである。又鐵道の存すると否とは其の地方の繁榮衰頹を岐つの原因となり、少くとも其の發達に遲速の相違を來さしめる。同じく鐵道の存する場所に就て見るも、鐵道が各地に對し各人に對し又は各貨物に對して其の取扱上にな當の差別を設けるときは、特惠せらるゝものと然らざるものとの間に於ける相對的地位に多大の相違